

教学 IR レポート

第5号

はじめに

各学科専攻にはディプロマポリシー（以下、DP）があり、そこに定められた資質・能力（DP 到達度）を高めるためのカリキュラムが各学科専攻に用意されています。この DP 到達度の向上を検証することは、各学科専攻の教育課程と体制を見直す1つ方法です。今回、学長室会の指示を受けて、学生の DP 到達度が学生自身のどのような学修行動・態度や生活活動と関係があるのかを分析しました。そして、分析結果に基づいて、学長室会及び各学科専攻で今後の教育改善について検討していただきました。分析に必要なデータは、教務課と総務課より提供いただきました。

《対象期間》

2020 年度後期～2024 年度前期。

《対象データ》

まず、今回使用しているデータは、2020 年度後期から 2024 年度前期までの、各学科専攻の DP に記された資質・能力である DP 到達度（Range: 0～4）です。

また、2023 年度の学修行動調査のデータ（授業態度、学修行動、学生生活における各活動の時間）を使用しています。授業態度は、授業に対する態度や感じ方を「1. ほとんどなかった」から「4. かなりあった」の 4 件法で尋ねています。学修行動は、授業以外の時間での各学修行動を「1. ほとんどしなかった」から「4. かなりした」の 4 件法で尋ねています。学生生活における各活動の時間については、開講期間中に 1 週間の中で各活動をどの程度時間行っていたかを「1. 0 時間」「2. 1～5 時間」「3. 6～10 時間」「4. 11～15 時間」「5. 16～20 時間」「6. 21～30 時間」「7. 31 時間以上」の 7 件法で尋ねています。

《データ算出方法》

DP の各資質・能力のデータ値は、各科目が各 DP に関与している度合い（カリキュラムマップとその科目の成績素点を積算した値を加算平均して出しています。また、学修行動調査における授業態度、学修行動、学生生活における各活動時間のデータ値は、各項目で回答された評価値をそのまま使用しています。

《分析方法》

各学科専攻・入学年度ごとに、DP 到達度と授業態度、学修行動、学生生活における各活動時間との間の相関関係を検討しました。0.3 以上の正の相関はオレンジ色で、-0.3 以下の負の相関は水色でペーストしています。

《DP到達度》

各学科専攻の DP は 2023 年度入学者より始まった新教育課程への変更に伴って、かなり変わりました。各 DP は配置された各科目に関与しており、各学科専攻には DP と科目の関係を表したカリキュラムマップがあります。DP 到達度を科目とのつながりを踏まえて理解しておく、結果の解釈がしやすくなります。以下をクリックして、各学科専攻のカリキュラムマップを確認してください。

共通教育（2023 年度以降）：<https://x.gd/nFdDD>

共通教育（2022 年度入学生まで）：<https://x.gd/tupeN>

人文学科 キャリア・イングリッシュ専攻（2023 年度以降）：<https://x.gd/5vrCr>

人文学科 キャリア・イングリッシュ専攻（2022 年度入学生まで）：<https://x.gd/AYH7b>

人文学科 保育・幼児教育専攻（2023 年度以降）：<https://x.gd/D9D1j>

人文学科 こども専攻保育コース（2022 年度入学生まで）：<https://x.gd/tNffF>

人文学科 児童教育専攻（2023 年度以降）：<https://x.gd/QHO04>

人文学科 こども専攻児童教育コース（2022 年度入学生まで）：<https://x.gd/4o6XD>

心理臨床学科（2023 年度以降）：<https://x.gd/L3rdY>

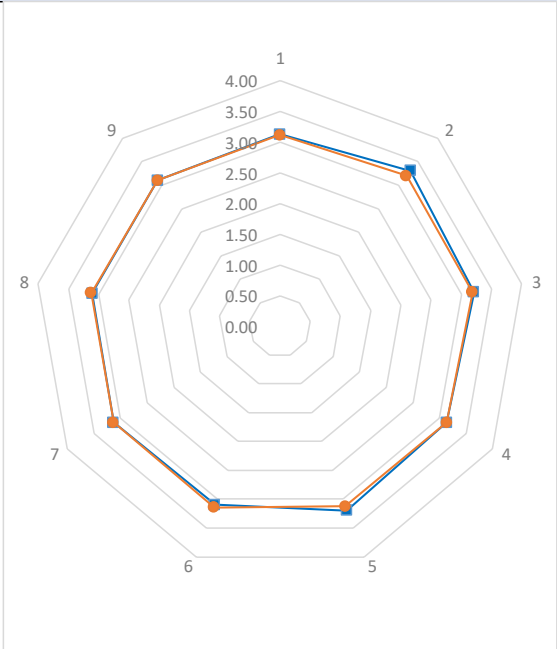
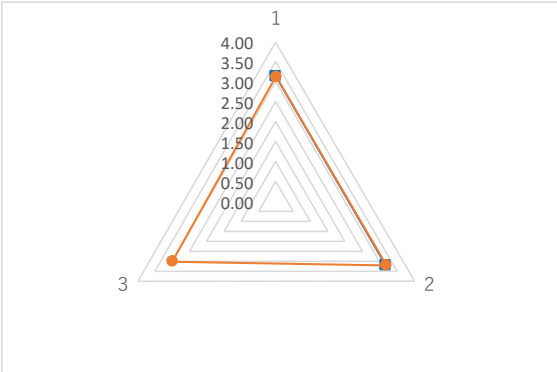
心理臨床学科（2022 年度入学生まで）：<https://x.gd/O1BnH>

心理臨床学科

心理臨床学科の DP 到達度と学修行動データの相関関係（2023 年度入学者）

2023 年度入学者 1 年生では、授業態度において、授業で提示された情報を書き取ることが多いと DP 到達度が高いという関連があった。また、学修行動において、他の学生と勉強したり話し合ったりすることが多いと共通教育の「社会のさまざまな分野で活動できる」という DP 到達度が高いことが分かったが、共通教育のカリキュラムマップでは 1 年次のフレッシュマンゼミがその DP 到達度の対応しており、フレッシュマンゼミでの授業形態や学修が他の学生との交流をベースとしたものであるため、その DP 到達度を引き上げたと考えられる。活動時間において、スマホの授業外利用が多いと「課題を発見して適切に解決できる」という DP 到達度が高いという相関がみられたが、これは授業外でのスマホによる情報検索やアプリ活用が課題に関わる情報のサーチに繋がっているのかもしれない。

<2023 年度入学者の 2023 年度終了及び 2024 年度終了時点の DP 達成度（心理臨床学科）>

ディプロマ・ポリシーの達成度			
(達成度の数値は0～4の範囲)			
専門教育科目			
項目	達成度 (2023年度終了時)	達成度 (2024年度終了時)	到達状況（グラフ）
①生物学的及び社会文化的に人の多様性を理解することができる	3.13	3.11	
②自己とは異なる他者視点で観たり考えたりすることができる	3.31	3.20	
③ストレスに直面しても受け止めて適応することができる	3.21	3.18	
④量的・質的に情報を収集・分析することができる	3.14	3.14	
⑤分析等を通じて論理的に考察して分かりやすく報告することができる	3.19	3.12	
⑥国内動向・国際社会情勢・SDGsの視点を身につけている	3.10	3.14	
⑦多様な情報から課題を見出し、解決方法を考案・実行することができる	3.13	3.13	
⑧基本的人権に関する多様な知識を身につけている	3.10	3.13	
⑨他者の利益や幸福への貢献に必要な態度・思考・活力を身につけている	3.10	3.10	
共通教育科目			
項目	達成度 (2023年度終了時)	達成度 (2024年度終了時)	到達状況（グラフ）
①社会のさまざまな分野で活動できる知識やスキルを身につけている	3.13	3.13	
②グローバルな視野を持ち、多様な価値観を受け入れることができる	3.18	3.19	
③地域や社会の変化とニーズに対応できる		3.00	

心理臨床学科の DP 到達度と学修行動の相関関係(2020-2022 年度入学者)

2020 年度入学者 4 年生、2021 年度入学者 3 年生、2020 年度入学者 2 年生では、授業態度で欠席・遅刻が多い学生ほど学科と共通教育の双方の各種 DP 到達度が低いことが明らかになった。また、必ずしも相関係数 0.3 に到達していないが、授業態度において、担当教員に親近感を感じることは、「考えや説明力を身につけている」「専門的知識を活用できる」「多様な他者を理解して共生する能力」という学科 DP 到達度や、「広い視野とバランスのとれた判断」「教養と専門を社会で活かす能力」「社会の変化やニーズに対応できる能力」という3つの共通教育 DP 到達度に関係があり、授業担当者に親しみを感じることの学修効果は一定程度あることがうかがえる。

また、0.2 以上の弱い相関ではあるが、学修行動において、インターネット上の資料を利用することが多いと学科や共通教育の DP 到達度に幾らか高いという関係があることがうかがえた。インターネットを通じた情報の選択・収集が近年の学生の学修では基本になりつつあるのかもしれない。

活動時間については絶対値 0.3 以上の相関はなかったものの、「広い視野とバランスのとれた判断」の DP 到達度は、授業の予習・復習・課題などの学修だけではなく、それ以外の学修とも弱い相関があり、広い視野をもてるようになるには、大学が提供する授業以外の活動も大切であることが示唆された。

キャリア・イングリッシュ専攻

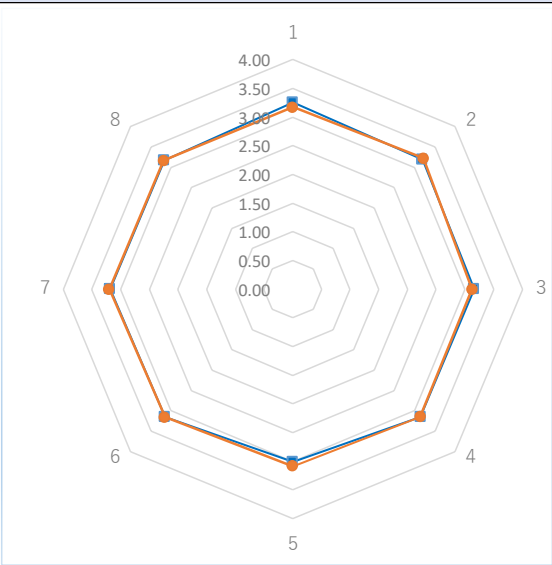
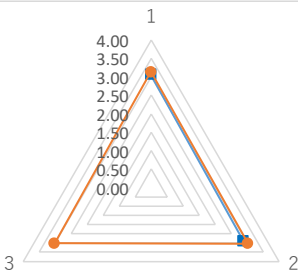
キャリア・イングリッシュ専攻の DP 到達度と学修行動の相関関係（2023 年度入学者）

2023 年度入学者 1 年生では、授業態度において、出席・遅刻がないことはもちろんだが、授業で提示された情報を書き取ること、授業を面白いと感じること、そして担当教員に親近感を感じることが多いと専攻課程の各種 DP 到達度が高いという相関関係があった。

また、学修行動では、図書館の資料を利用すること多いと専攻課程の各種 DP 到達度が高いという関連があった。また、職員に学修方法やキャリアについて相談することが「知識やスキルを活用して課題解決する力」の高さと関係があり、科目での職員との関わりが重要であることがうかがわれる。

そして、活動時間については、授業への出席は当然だが、授業の予習・復習・課題に取り組むことが多いと専攻課程の各種 DP 到達度が高いこと、アルバイトが多いと専攻課程の各種 DP 到達度が低いことが分かった。また、読書の多さが、「知識やスキルを活用して課題解決する力」が高いことも興味深い。

<2023 年度入学者の 2023 年度終了時及び 2024 年度終了時点の DP 達成度（キャリア・イングリッシュ専攻）>

ディプロマ・ポリシーの達成度			
(達成度の数値は0～4の範囲)			
専門教育科目			
項目	達成度 (2023年度終了時)	達成度 (2024年度終了時)	到達状況（グラフ）
①英語の4技能・5領域の修得している	3.25	3.17	
②実践的で高度な英語力でコミュニケーションできる	3.19	3.22	
③英語圏の社会・歴史・文化・言語・文学への深い理解を身に着けている	3.16	3.13	
④国際的で学際的な視野が持つことができる	3.15	3.14	
⑤社会の課題を自分事として捉え、自分の行動につなげることができる	3.01	3.08	
⑥自分と異なる人や文化を尊重でき、多様な人々と関わることができる	3.14	3.15	
⑦社会の出来事や課題に関心をもち、それを発信・説明することができる	3.18	3.20	
⑧獲得した知識やスキルを活用し、課題解決につなげることができる	3.17	3.18	
共通教育科目			
項目	達成度 (2023年度終了時)	達成度 (2024年度終了時)	到達状況（グラフ）
①社会のさまざまな分野で活動できる知識やスキルを身につけている	3.06	3.14	
②グローバルな視野を持ち、多様な価値観を受け入れることができる	2.91	3.03	
③地域や社会の変化とニーズに対応できる		3.03	

キャリア・イングリッシュ専攻の DP 到達度と学修行動の相関関係(2020-2022 年度入学者)

2020 年度入学者 4 年生、2021 年度入学者 3 年生、2020 年度入学者 2 年生では、まず授業態度において、欠席・遅刻が多いことは専攻課程の各種 DP 到達度の低さに関係していた。また、相関係数 0.3 に達していないが、担当教員に親近感を抱くことが多いと、「課題を分析し解決・結論に導くことができる」という DP 到達度が高いことが分かり、担当教員の親しみやすさは学修意欲を高めることがうかがわれる。

また、学修行動に関しては、相関係数 0.3 に達していないものも含むが、教員に授業内容等の質問・相談をすることやキャリアについて相談することが多いと、「英語運用能力」や「グローバル社会の多様性を理解できる」「積極的かつ適切に発言・発信できる」「広い視野とバランスのとれた判断をする」という DP 到達度が高いことが分かり、教員との交流が DP 到達度の上昇において重要であることが示唆される。その他に、相関係数 0.3 に達しないが、他の学生と勉強したり話し合うことが「英語運用能力」「IT リテラシー・ビジネスコミュニケーション力」や「グローバル社会の多様性を理解できる」ことの高さに関係し、また、職員にキャリアについて相談することが「英語運用能力」や「グローバル社会の多様性を理解できる」「積極的かつ適切に発言・発信できる」「広い視野とバランスのとれた判断をする」とことと関係があった。

そして、活動時間においては、相関係数 0.3 に達していないものも含むが、ボランティア活動が多いと共通教育の各種 DP 到達度が高いことも分かり、ボランティア経験の有用性が示唆される。

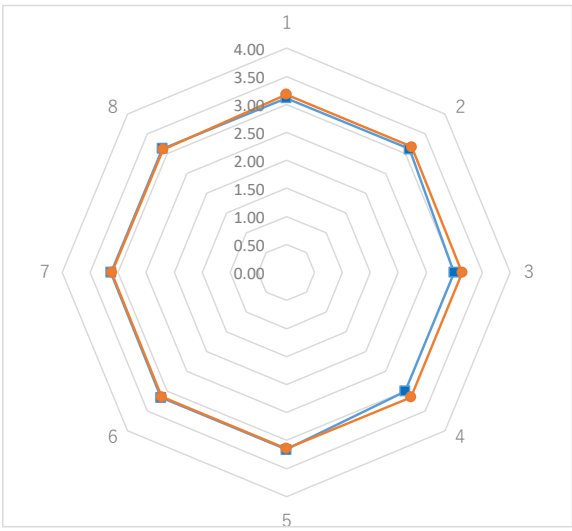
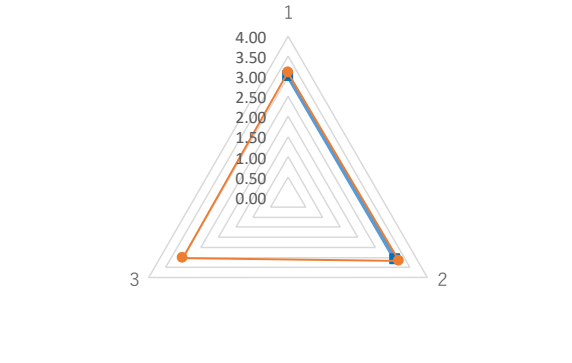
保育・幼児教育専攻

保育・幼児教育専攻の DP 到達度と学修行動の相関関係（2023 年度入学者）

2023 年度入学者 1 年生では、授業態度において、出席・遅刻や居眠りがいいだけでなく、特に担当教員に親近感を感じることが多いと専攻課程や共通教育課程における全ての DP 到達度が高いことが分かった。また、学修行動では、特に、他の学生と勉強したり話し合ったりすることや、教員や職員に授業内容・方法を相談することが多いと専攻課程や共通教育課程の全ての DP 到達度が高いことが分かった。こうした結果から、教職員と学生との距離が近くていろいろと相談することは学習モチベーションを高めて、DP 到達度も引き上げる可能性が示唆された。

また、活動時間については、特に、学生自治会の活動が多いと専攻課程や共通教育課程の各種 DP 到達度が低いという関係が見いだされ、学生によっては学生自治会の活動が保育・幼児教育の学修機会を奪う場合があり、その学修を妨げる可能性があることがうかがえる。

＜2023 年度入学者の 2023 年度終了及び 2024 年度終了時点の DP 達成度（保育・幼児教育専攻）＞

ディプロマ・ポリシーの達成度			
専門教育科目			
項目	達成度 (2023年度終了時)	達成度 (2024年度終了時)	到達状況（グラフ）
①保育・幼児教育の考え方や理論を修得している。	3.12	3.18	
②保育・幼児教育の考え方や理論を現場等で活用できる。	3.12	3.17	
③保育・幼児教育の様々な研究法や技法について修得している。	3.00	3.14	
④研究法や技法を実践することができる。	3.00	3.15	
⑤保育・幼児教育の課題を実践的に学び、対応力・判断力を修得する。	3.16	3.14	
⑥他者と協働して課題解決することができる。	3.16	3.14	
⑦多様な他者を理解し、尊重する視点を身に付ける。	3.13	3.11	
⑧保育・幼児教育の視点から社会の動向を考察することができる。	3.13	3.11	
共通教育科目			
項目	達成度 (2023年度終了時)	達成度 (2024年度終了時)	到達状況（グラフ）
①社会のさまざまな分野で活動できる知識やスキルを身につけている	3.02	3.10	
②グローバルな視野を持ち、多様な価値観を受け入れることができる	3.07	3.18	
③地域や社会の変化とニーズに対応できる		3.03	

保育・幼児教育専攻の DP 到達度と学修行動の相関関係(2020-2022 年度入学者)

2020 年度入学者 4 年生、2021 年度入学者 3 年生、2020 年度入学者 2 年生では、まず授業態度においては、担当教員の話聞いて書き取ることが多いと専攻課程の「保育・幼児教育の課題を整理・分析して考察できる」という DP 到達度が低いことが分かった。この DP 到達度は特別研究・卒業研究に関わるため、回答者は十数名と少なかったが、それでも負の相関関係にあったことは何らかの意味があるものと推察される。

また、学修行動に関しては、相関係数 0.3 に達していないものも含むが、教員や職員にキャリア相談を行うことが多いと専攻課程の各種 DP 到達度が高いことが分かり、学生や教職員の保育士・幼稚園教諭養成に対する意識が学生の各種 DP 到達度を引き上げていくことが示唆される。

そして、活動時間においては、専攻課程の DP 到達度に限定して言えば、授業の予習・復習・課題などの学習が少なくそれ以外の学習が多いと「保育・幼児教育の理論を説明できる」という DP 到達度が高いという相関が示した。知識・理論修得の DP 到達度を引き上げるためには授業外学習が重要だということが示唆されるが、実際のところどうなのであろうか。また、特別研究・卒業研究に関して、特にアルバイト・定職の勤務時間が少ないと「保育・幼児教育の課題を整理・分析して考察できる」という DP 到達度が高いことが分かった。アルバイトや定職が長いと特別研究や卒業研究を妨げる可能性がうかがわれる。

兒童教育專攻

児童教育専攻の DP 到達度と学修行動の相関関係（2023 年度入学者）

2023 年度入学者 1 年生では、授業態度において、欠席・遅刻の多さはもちろん DP 到達度に負の関係にあるが、授業を面白いと感じることや内容を理解できたと感じることが多いと特に専攻課程の全ての DP 到達度が高いことが分かった。DP 到達度上昇において、興味関心と納得感が授業で重要であることを示唆する。

学修行動においては、特に、インターネット上の資料を利用すること、他の学生と勉強したり話し合ったりすること、そして教員にキャリア相談をすることが多いと、専攻課程や共通教育課程の DP 到達度の高いという相関関係が見いだされた。これらの学修行動は専攻課程や共通教育課程の DP 到達度を引き上げる可能性がうかがわれる。

そして、活動時間においては、授業への出席が少ないことはもちろん DP 到達の妨げになるが、授業の予習・復習・課題などの学習が多く、一方読書は少ないと、専門課程の全ての DP 到達度が高いという相関関係が見いだされた。予習・復習・課題への取り組みは DP 到達度を上昇させることは容易に想像できるが、読書が負の相関関係にあったのは、読書時間が取れないほどに授業に関わる学習に時間を割いていることを反映しているのかもしれない。

<2023 年度入学者の 2023 年度終了及び 2024 年度終了時点の DP 達成度（児童教育専攻）>

ディプロマ・ポリシーの達成度			
（達成度の数値は0～4の範囲）			
専門教育科目			
項目	達成度 (2023年度終了時)	達成度 (2024年度終了時)	到達状況（グラフ）
①学校教育や学習指導に関する知識・技能を修得している	3.19	3.20	
②多様な児童等のニーズに適切かつ柔軟に応じる為の知識・技能を習得している	3.16	3.20	
③適切な指導のために必要な多様な知識・技能を修得している	3.14	3.18	
④柔軟かつ効果的に知識・技能を教育現場や指導に活かすことができる	3.15	3.17	
⑤教育者としての使命・責任を理解している	3.18	3.25	
⑥チーム学校の構成員として他者と協働して課題を解決することができる	3.18	3.25	
⑦地域や児童の実態に合わせた適切な指導を計画することができる		3.12	
⑧他者との協働に基づいた持続可能な社会の担い手を育成することができる		3.12	
共通教育科目			
項目	達成度 (2023年度終了時)	達成度 (2024年度終了時)	到達状況（グラフ）
①社会のさまざまな分野で活動できる知識やスキルを身につけている	3.14	3.12	
②グローバルな視野を持ち、多様な価値観を受け入れることができる	3.15	3.18	
③地域や社会の変化とニーズに対応できる		3.08	

児童教育専攻の DP 到達度と学修行動の相関関係(2020-2022 年度入学者)

2020 年度入学者 4 年生、2021 年度入学者 3 年生、2020 年度入学者 2 年生では、まず授業態度においては、欠席・遅刻の多さは DP 到達度に負の関係があるが、板書やスクリーンの内容を書き写す、担当教員の話聞いて書き取る、授業を面白いと感じる、担当教員に親近感を感じるが多いと「対応力・判断力・問題解決力」という DP 到達度が高いことが分かった。担当教員の魅力だけでなく授業の展開などが学生の関心と創造力を掻き立てて、「対応力・判断力・問題解決力」という DP 到達度を引き上げているのかもしれない。

また、学修行動に関しては、特に専攻課程に限定すると、学外の講座・講習を受講することが多いと各種 DP 到達度が高いという正の相関関係がみられた。学内の授業だけではない学外学修が児童教育専攻の DP 到達度を引き上げるのだとすれば、その学外学修の実態はどのようなものなのか興味深いところである。また、職員にキャリア相談をすることが多いと「対応力・判断力・問題解決力」という DP 到達度が低いという負の相関関係がみられたが、これはどのような意味なのか議論をする必要がある。

そして、活動時間においては、専攻課程の DP 到達度に限定して言えば、スマホの使用が多いと「対応力・判断力・問題解決力」という DP 到達度が低いという負の相関関係がみられた。これは、やはりスマホに熱中しすぎることが学修の妨げになって、この DP 到達度の上昇を食い止めてしまうのかもしれない。

教育改善検討

分析結果に対するご意見

上記の分析結果に基づいて学長室会で本学の教育改善のための検討が行われたが、各学科専攻で学生の特質や文脈に応じた検討が必要であることが確認されて、各学科専攻での検討に至った。また、学長室会では、学外公表するのであれば分析結果の分かりやすい説明が必要であること、DP 到達度は学年に比例した積み上げ式計算にするとよいことが指摘され、それらは今後改善することが確認された。

各学科専攻の検討では特に人文学科では、次の意見が提示された。①数値データの取り扱いは慎重にすべきである。これについては、各変数のデータ分布を確認して外れ値を削除するなどの必要があったものの、DP 到達度が科目履修に応じて加算的に増加する数値になっていないこともあり、学修行動・態度と DP 到達の本質的な関連を示すことができなかった可能性がある。②関連だけでなく無相関からも検討すべきである。これについては、IR・情報委員会と IR・情報室で相関結果からシンプルに解釈できるものに限定してコメントを付したが、各学科専攻のカリキュラムマップ、取り組み、文脈を踏まえた解釈にはなっていない。各学科専攻のカリキュラムマップや取り組み等を踏まえた理解をするには IR・情報委員会と IR・情報室では限界があり、それを含めた検討を各学科専攻に委ねたところである。

以下では、各学科専攻で分析結果をもとに検討した結果、提出された今後の教育改善案である。各学科専攻は教育改善案に基づいて取り組みを進めていくものと考えられる。

心理臨床学科

心理臨床学科では分析結果に基づいた検討によって、教育改善にかかる以下の示唆が提示された。

1 年次は欠席・遅刻と DP 到達度との関連がみられないのに対し、2 年次以降は「欠席・遅刻が多いと DP 到達度全般で低い」という相関がみられるようになる。そのような関係が見られる理由は、極端に DP 到達度が低く、欠席・遅刻が極端に多い学生が 2 年次以降に出現することによるのではないかと考えられた。その理由としてまず考えられるのは、欠席・遅刻が多いことによって、学習が十分に進まず DP 到達度が低下する可能性であるが、授業についていけないことによってやる気を無くし、DP 到達度が低下している可能性もある。1 年次の時点で、出席しているが DP 到達度の低い学生を抽出し、必要かつ個別最適な学習支援を提供する必要があることが教員間で共有された。

キャリア・イングリッシュ専攻

キャリア・イングリッシュ専攻では分析結果に基づいた検討によって、教育改善にかかる以下の示唆が提示された。

授業で教員が学生に与える好印象や教員が学修相談に対応することが DP 到達度全般にポジティブに関係しており、引き続き、現在の教員個々の取り組みや学修・キャリア相談を続けていくことが確認された。一方で、学生の出席率の低さやアルバイト等の時間の多さは全般的に DP 到達度と負の相関関係が見られた。アルバイトについては学生自身にかかっているが、教職員が学生と協力して出席率を改善し、学生が学業と仕事のより良いバランスを見つけられるように支援する必要があることが確認された。

保育・幼児教育専攻

<2023 年度入学者の昨年度 1 年生について>

(授業態度)

出席・遅刻や居眠りがないことに加え、担当教員に親近感を感じる人が多いとされ、専攻課程や共通教育課程における DP 到達度が高いことが確認された。これは、学生が教員との距離感を

縮め、積極的にコミュニケーションを取ることが学習の質を向上させる要因であることを示唆している。さらに教員と学生の関係性を深めるため、以下の取り組みが有効であることが確認された。

・個別面談やフィードバックの実施：定期的に学生一人一人に対する個別のフィードバックや面談の機会を設けることで、親近感が増し、学習意欲を高めることが期待される。

・グループディスカッションの導入：授業内でのグループワークやディスカッションの時間を増やし、学生間での意見交換や教員との対話を促進することで、学習の深まりを図ることができる。

（学修行動）

学修行動においては、他の学生との勉強や話し合い、教員や職員への相談が多いことが DP 到達度の向上に寄与することが分かった。学生同士や教員との積極的な学びの交流が学習効果を高めていることが明らかである。これを強化するために、①チューター制度やピアレビュー活動を導入し、学生間での学び合いの機会を増やすこと、②教員や職員への学習方法や内容の相談がしやすい環境を提供すること、が有効であることが共有された。

（活動時間）

学生自治会活動が多い学生において、DP 到達度が低い傾向が見られた。学生自治会活動自体は重要な学外活動であるが、学修時間とのバランスを取ることが重要である。改善策として、①学生自治会活動と学修の両立を支援するため、時間管理のワークショップを提供し、効率的な学習方法を指導すること、②学生自治会と学業との役割分担や活動内容の調整を行い、学業に支障が出ない範囲で活動できるように配慮すること、などが確認された。

<2020-2022 年度入学者の昨年度 2～4 年生について>

（授業態度）

授業態度に関しては、担当教員の話聞いて書き取ることが多い学生が専攻課程の「保育・幼児教育の課題を整理・分析して考察できる」という DP 到達度が低いことが分かった。この DP 到達度は特別研究や卒業研究に関わるため、回答者は十数名と少なかったが、それでも負の相関関係が見られたことには何らかの意味があると推察される。改善点としては、ただ書き取るのではなく、学生が能動的に考え、課題を整理・分析する力を養うために、①学生が積極的に課題を考察し、ディスカッションを通じて理解を深めることができるアクティブラーニングを授業に取り入れること、②実際の保育・幼児教育の現場に基づいたケーススタディを導入し、学生が問題を整理・分析し、実践的な解決策を考える機会を増やすこと、が確認された。

（学修行動）

教員や職員にキャリア相談を行うことが多い学生が専攻課程の各種 DP 到達度が高いことが分かった。これは、学生や教職員が保育士・幼稚園教諭養成に対する意識を高めることが、学生の DP 到達度を引き上げることを示唆している。これを強化するために今後も、①学生が教員・職員とキャリアに関する意見交換を行う機会を増やすこと、②学生が進行中の課題や研究に対して積極的にフィードバックを受けられる環境を整えること、が確認された。

（活動時間）

授業の予習・復習・課題などの学習が少なく、それ以外の学習が多いと「保育・幼児教育の理論を説明できる」という DP 到達度が高いという相関が示された。知識・理論修得の DP 到達度を引き上げるためには、授業外学習が重要であることが示唆されている。この示唆を踏まえて今後、①学生が自主的に授業外で学習できるための支援策としてオンライン教材を充実化し、グループ学習・フィールドワークの機会を増やすこと、②学外活動が理論的な知識修得にどのように貢献しているかを評価し、その成果を授業内でのディスカッションや発表に反映させる機会を増やすこと、が確認された。

また、特別研究・卒業研究に関連して、アルバイト・定職の勤務時間が少ない学生が「保育・幼児教育の課題を整理・分析して考察できる」という DP 到達度が高いことが分かった。アルバイトや定職が長いと特別研究や卒業研究を妨げる可能性があることがうかがわれる。この示唆を踏まえて、①学生が学業を優先できるよう、アルバイトの時間管理ができるための教育・指導・支援体制を整

えること、②アルバイト負担の軽減策を講じ、学生が研究に集中できるような支援体制を築くこと、が確認された。

児童教育専攻

2023 年度入学者も 2020～2022 年度入学者も、ボランティア活動が有意に DP 到達度に作用していないことが明らかになった。改善案として、科目「教師力演習」を 1 年生前期に移動して、その科目授業内でボランティアを推奨し、学生における学習知と実践知の往還を充実化することが確認された。

発行

〒860-8520 熊本市中央区黒髪3-12-16
九州ルーテル学院大学

IR・情報委員会／総務課 IR 情報室

2025年8月5日発行